

に へい まさ と 仁 平 政 人

学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文博第 292 号
学位授与年月日	平成21年 3月25日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	東北大学大学院文学研究科(博士課程後期 3 年の課程) 文化科学専攻
学位論文題目	川端康成の研究
論文審査委員	(主査) 教授 佐藤伸宏 教授 仁平道明 准教授 佐倉由泰 准教授 片岡 龍

論文内容の要旨

本研究は、川端康成の文学活動について、文壇的な出発期から晩年に至るまで一つの重要な脈絡を為したと考えられる、二十世紀のモダニズム文学(芸術)の動向との交通に焦点を合わせて検討したものである。「モダニズム」という用語は、日本文学の文脈においては、二十世紀的な前衛芸術運動と、一九二〇～三〇年代における都市風俗文化と関わる動向というように、二つの異なる含意において用いられてきた。このような「モダニズム」という用語の多義性は、研究においても、時に二つの意味が混同され、あるいは両者を併せるような形で議論が進められるといった傾向を招いてきたと見られる。しかし、後者の「都市風俗」に関わるような意味が強調される(換言すれば、外的な社会状況の反映としてテキストが扱われる)時、芸術運動としての「モダニズム」が本来持っていた、〈現実の再現〉というリアリズム的な芸術の規範に抗い、表現そのものを問題化する性格は、往々にして見失われてしまう。以上を踏まえつつ、本研究ではこの用語を、芸術の制度(文学の場合、特に媒体としての言語)自体が強く問題化されるとともに、一般的に表象性の解体などに特徴付けられるような多様な実践が生み出されていく、二十世紀初期の文学(芸術)動向を指すものとして用いる。

川端康成が大正期において、横光利一らと共に雑誌『文藝時代』において〈新感覚派の旗手〉として活動し、以後も同時代のモダニズム文学の展開に対して深い関わりを示し続けていたということはよく知られている。だが、このような川端文学のモダニズム的な性格に関する総体的な究明は、従来十分に進められてきたとは言い難い。こうした研究状況は、川端に対する今日的な評価が、昭和二十年後半から三十年代にかけての「伝統」再評価の文脈と連動して、〈日本的・伝統的な作家〉といった評価の枠組みとあわせて成立してきたということと密接に関わっていると考えられる。そしてこうした評価の

枠組みの下で、川端の「モダニズム」との関係という問題は、川端の固有の「資質」に基づくものとして回収され、あるいは一時的・非本質的な問題として位置付けられてしまう傾向があった。このような研究状況の問題を踏まえれば、川端の小説の試みや批評言説の性格を二十世紀モダニズムの地平において詳細に検討することは、なお重要な課題であると考えられよう。それは、単に川端のみに関わる問題ではなく、日本におけるモダニズム文学の受容と展開の検討にも寄与するものと考えられる。

本論では第一に、川端における「モダニズム」という問題を、特に川端の「言葉」をめぐる問題意識と、その小説の方法的な性格との関連という問題に照準を合わせて検討することを課題とした。川端は作家的な出発以降、〈言語論的転回〉以後というべき認識に立脚して、「リアリズム」的文芸観を否定し、「言葉」をあくまで問題化しつつ多様な表現の実践を試みるような立場を、晩年に至るまで示し続けている。そしてそれは、川端テキストの様式的な特質とも、明瞭に関わっていると見られるのである。本論では、このような川端の理念的立場がいかなる過程において形成され、展開しているかを追求すると共に、諸小説テキストの性格を様式的な次元に注目しつつ詳細に検討し、小説的な方法と理念的なベクトルがどのように関わっているか解明を試みた。

また、本論の第二の課題は、川端におけるモダニスト的な立場と「日本」・「伝統」をめぐる言説との接続について検討し、旧来の川端評価の枠組みを問い直す視野を開くことである。特に戦中から戦後にかけて、川端は「日本」や「古典」・「伝統」をめぐる言説を数多く提示しており、旧来の〈日本的・伝統的な作家〉という川端評価の枠組みは、しばしばこうした諸言説を根拠として形成されてきたと考えられる。このような川端における「東洋」や「日本」・「古典」などへの志向は、従来モダニズムとは対極的な方向性として捉えられてきた。しかし、川端の「東洋」をめぐる言説とは、そもそも大正末期のモダニズム／アヴァンギャルドの言説との交通から生じたものであり、そしてその論理は、以降の川端の「日本」言説にも確実に連続していくと見ることが出来るのである。本論文では、川端における「日本」をめぐる言説の論理を、初期からの方法的な文脈との関わりから再検討することを通じて、戦後の川端評価が持つ本質主義的な傾向を批判的に問い直すとともに、モダニズムと「日本」・「伝統」言説とが接続する論理を解明することを課題とした。

第一章 川端康成の初発期—「新感覚主義」の生成と射程—

第一章では、川端の初発期——具体的には、作家的な出発から雑誌『文藝時代』での活動期まで（大正十年～昭和二年）——を対象に検討を行った。この初発期の川端の活動に関しては、従来、「孤児」や「失恋事件」といった伝記的コンテクストとの関連が過度に重視される一方で、その前衛主義的な文芸理念や、高度な実験性を持つ小説テキストの内実や同時代の位置などは、長く閑却されてきた。本章では、川端の批評言説と小説テキストの双方について、同時代の文学・芸術言説との関わりを視野に入れつつ検討することを通じて、その「新感覚派」としての理念的立場と小説的な方法の形成・展開について追求を行った。

第一節 初発期川端康成の批評—「表現」理念の形成—

この節では、川端康成の初発期の批評言説の性格について解明することを課題とした。初発期の川端の批評が、「新感覚派」の文学活動を主導する役割を果たしたことはよく知られている。だが、その批評言説の持つ前衛主義的な性格の内実は、これまで十分に解明されてこなかった。本節では、川端の批評言説が持つ性格について、同時代の文学・芸術をめぐる言説、特に川端が当時しばしば言及していたイタリアの美学者ベネデット・クローチェの美学との関わりに注目して、検討を試みた。川端の議論は、

「表現」(言語)に人間の認識を形成する役割を見出し、そこに芸術と生との関わりを位置付けるという議論の枠組みにおいて、クローチェ美学との共通性を示している。しかしその一方で、川端の議論は、言語を「慣習」的・集团的規約と位置付け、人間の認識が言語によって束縛されていると見なすという点で、クローチェとは異質な前提に立つものであり、このような文脈において、「表現」の変革を文芸の目的とする川端の前衛主義的な立場は成立していると考えられる。本節では、以上のような川端の前衛主義的な論理を解明するとともに、「新進作家の新傾向解説」に代表される川端の所謂「新感覚派」理論について、意識的な思考の外部への志向を通じて既成の言語の秩序に変容をもたらす方法論としての性格を持っていたということを明らかにした。このような川端の「表現」をめぐる理念的言説は、以降の川端の小説様式のあり方に密接に関わっていると見られるとともに、一面では、その「東洋主義的」な立場の成立にも結びついていると考えられる。

第二節 「招魂祭一景」論—「夢」と言葉—

この節では、川端の文壇的な出世作として知られる「招魂祭一景」を取り上げた。このテキストに対しては、新感覚派の先駆としての評価が為されてきた一方で、「視覚性」を強調する(リアリズム的な)評価も繰り返し為されており、その二つの評価の関係はこれまで十分に整理されてこなかった。本節では、このような評価を導くテキストの特質について、主人公・お光の「疲れ果てた」諸感覚に焦点化する語りと、「夢と現」の揺れ動きを形づくる表現という点から分析するとともに、お光の意識の動きがいかなる地点に至るのかを検討した。このお光の「夢と現」の揺れ動きは、テキストの末尾で、現実という次元を離れて、表層的な表現の連鎖を形づくるような言葉の運動に接続していく。ここに認められるのは、描写／再現という枠組みに密接に関わりつつ、同時にそこから逸脱・離反していくテキストの性格であると考えられる。本節ではこうした「招魂祭一景」の性格を解明するとともに、それが、習作期において「写生」を理念とする立場から出発しつつ、やがてリアリズム的な文芸観に対する批判へと向かう、川端の文学的な展開と対応していることを示した。

第三節 「青い海黒い海」論—「感覚」と「言葉」—

「青い海黒い海」は、川端康成の「新感覚派」期を代表する前衛的なテキストとして捉えられながらも、その前衛性の内実については、長く十分な検討が為されてこなかった。本節では、このテキストについて、川端の理論的な言説との相関を視野に入れつつ詳細に分析し、その同時代的な位相を解明することを試みた。川端の「新感覚派」言説は、意識の流動的に移りゆく様相への接近を理念化するという点において、「感覚」や「生命」の直接的な表現を志向する同時代の「新感覚派」／アヴァンギャルドの広範な言説と重なりあうように見られる。しかし、「青い海黒い海」に提示されるのは、むしろ「感覚」や意識の運動を直接的に捉えることの不可能性、換言すれば「言葉」という本質的な〈遅れ=隔たり〉の所在であると考えられる。そしてそれは、物語的な全体性から切断された断片のみを提示し、流動的に連関する言葉の運動性それ自体を前景化するテキストの様態と対応しているのである。本節では、こうしたテキストの性格について、川端の「新感覚派」的立場が持つ固有の「言葉」をめぐる問いを提示するものとして位置付けた。

第四節 「春景色」論—「写実」とその解体—

この節では、初発期の代表作として評価されるテキストである「春景色」について検討を行った。このテキストは、春の風景の「スケッチ」などというように、従来「自然」の〈再現=表象〉という観点

で理解されてきた。本節では、このテキストの成立過程に目を向けるとともに、同時代の文学・美術における「写実」に関する諸言説との交通を視野に入れつつ検討を行った。このテキストに認められるのは、外界の「写実」を試みる風景画家「彼」に寄り添いつつ、その営為がはらむ亀裂と困難を示し、さらには「写実」的な立場自体が持つ根本的な虚構性が提示するあり方である。それは、外界の事物の提示という文脈に収まらず、言葉の水平的な連鎖性を提示していくレトリックの性格とも対応していると見られる。本節では、以上のような「春景色」の性格を川端の「新感覚派」的な立場・方法との関連で位置付けるとともに、川端文学における〈自然を書くこと〉の意義について考察することを試みた。

第二章 昭和初年代の川端康成一方法の諸展開―

第二章では、狭義の「新感覚派」運動が終息し、所謂「新興芸術派」を中心に多様なモダニズム文学の展開が示されていく昭和初年代における、川端の文芸活動の性格・位相について検討を行った。この時期の川端は、批評等において同時期のモダニズム文学の展開に敏感に反応し続けるとともに、小説テキストにおいて多様な試みを行い続けている。しかしこの時期の川端テキストは、『雪国』に至る過程の模索期と見なされる傾向と合わせて、「抒情歌」や「禽獣」など一部のテキストを除き、長く等閑視されてきた。また、一九八〇年代以降、「都市論」の流行と合わせて所謂〈浅草もの〉のテキストが脚光を浴びるようになるが、これらに注目する議論では、時に川端のモダニズム的試みが実体的な「都市」との関わりという点に回収されてしまう傾向があったと見られる。本章では昭和初年代の川端の活動の中でも、従来十分に脚光を浴びてこなかった問題領域と、主に川端の「個性」や「思想」に還元されてきた代表作についての検討を課題とした。

第一節 川端康成における「新心理主義」一方法としての〈心理〉―

この節では、川端康成の所謂「新心理主義」期の試みについて検討を試みた。昭和五～六年にかけて、川端康成は、伊藤整の小説・批評やフロイトの精神分析学、ジョイスの『ユリシーズ』などを受容しながら、「新心理主義」と位置づけられる先鋭的なテキストを発表している。しかしこうした川端の試みの内実は、従来性急な「実験」として否定的に捉えられ、あるいは川端の本来的な「資質」に回収されることで、十分に解明されてこなかった。本論では、昭和五年前後における精神分析と文学との交流に関する諸言説との対比から、川端の立場の特異性を捉えるとともに、川端の小説テキストが示す性格を検討することを試みた。同時代の〈心理 - 文学〉をめぐる言説空間において川端の発言を特徴付けているのは、精神の実体的な把握を志向することなく、あくまで表現の様式を変革することを目的とする、方法的な立場であると考えられる。そしてそれは、「針と硝子と霧」などの小説テキストが示す、精神の一義的な深層の提示などに向かうことのない、流動的で錯綜したエクリチュールを形成する性格とも対応しているのである。本節では、以上のような川端の「新心理主義」的な試みの性格を解明するとともに、このような実践の方向性が、以降の小説テキストの様式的な特質や、その「日本回帰」的な言説の形成にもつながる性格を持っていることを論じた。

第二節 「抒情歌」論―「夢」の破れ目―

この節では、川端の初期の代表作の一つとされる「抒情歌」について、川端の「思想」という水準を中心化してきた研究史を批判し、〈虚構〉を語るという営為をめぐるテキストとして再検討を行った。「抒情歌」は、「輪廻転生の抒情詩」を読むことによって「愛の心をとりもどし」た者として自身を提示しながら、その語りの中で自らの言葉を裏切り「あなた」への愛執を露呈させていく女性の独白により

形づくられている。本節では、こうした「抒情歌」の内容について、「夢」／虚構を通じて自らの心を回復させようとする営みが、破綻に導かれる過程に注目して検討を試みた。龍枝の「さとりの抒情詩」を語る行為は、その連想的＝水平的な性格とあわせて、自身の意図を裏切るような思考を度々導いてしまうことになる。すなわち龍枝の虚構的な営みは、言葉を語るという行為の次元で失効していると考えられるのである。このようなテキストのあり方について、本節では、慣習的な規約としての「言語」による人間の生の拘束を問題化する立場から出発し、虚構による生の変容と、物語的な秩序を解体するような「表現」とを共に志向していく川端文芸の性格と対応していると位置付けた。

第三節 「散りぬるを」論—「小説」としての「事件」—

この節では、川端の「犯罪小説」群を代表するテキストである「散りぬるを」について検討を試みた。「散りぬるを」は、昭和五年に起きた殺人事件を素材に、菊池甚一の著書『病的殺人の研究』に基づいて、「訴訟記録」や精神鑑定記録といった法的・社会的な言説を作中に大量に取り入れることで成立しているテキストである。本節では、「散りぬるを」と『病的殺人の研究』との関係を検討することを通じて、この小説テキストが持つ、精神医学的な言説の虚構性を提示するような批評性について指摘した。その上で、このテキストの特質として、「訴訟記録」をはじめとした他者の言葉を読み、それに促されて流動的に生成していくという様式的な特質を通じて、一義的な結論に向けて統合されることなく、錯綜した言葉の様態を前景化しているという点を解明した。こうしたテキストのあり方は、「現実」／「非現実」という通念的な二分法を解体し、私たちの生を成り立たせ、同時に限界付ける〈言葉〉の次元を再帰的に指し示すような性格を持っていると考えられる。本節では以上のような「散りぬるを」の性格を解明するとともに、そこから昭和初年代の川端テキストにおける社会的な〈現実〉のコンテキストとの交通の性格について考察することを試みた。

第三章 川端康成の戦後—「新感覚主義」のゆくえ—

第三章では、川端の戦後のテキストについて、川端の盟友であった横光利一の問題も補助線としつつ解明を行った。川端の戦後の活動については、従来、川端自身の終戦直後の諸言説を参照しつつ、戦前期から切断された性格を見出し、その「転換」や「変容」の内実——「日本」「伝統」回帰や「魔界」への志向など——を探ろうとする議論が、今日に至るまで数多く重ねられてきた。しかし、戦前／戦後の間の切断を自明化するこのような議論においては、その境界をまたぎこして連続する脈絡が捨象されてきたと言える。以上の問題を踏まえつつ、本章では、川端評価の枠組みが戦後に形成されてきた過程を確認した上で、戦後の諸テキストに関して、初期から連続する方法的な性格を解明することを課題とした。

第一節 横光利一「微笑」論—横断する〈希望〉—

この節では、横光利一の最後の小説「微笑」について分析し、横光の〈戦後〉という問題について検討することを課題とした。このテキストについては、敗戦後の現在から戦中の記憶が回想される小説の構図に基づいて、戦中期の横光自身を対象化する性格、または「贖罪」や「再出発」の意志などが見出されてきた。しかし、こうした議論は〈戦中／戦後〉の切断を強調することにおいて、結果的に横光の戦後の言説と共犯関係を結んでしまっているとも考えられる。本論では、「微笑」と、『旅愁』および戦時下の横光の言説との関わりを検討し、「微笑」の構図や戦後の横光の言説が、戦中期までの活動との連続性を示していることを指摘した。その上で、「微笑」の詳細な分析を通じて、その批評性の所在を、

戦中／戦後の連続性を露呈させ、さらには戦中と共通する横光自身の思考のあり方を解体してしまう、モダニスト的な方法と通底する小説の性格において位置付けた。このことは、横光に対する深い意識と共に始発していく、川端の戦後の営為を捉える上でも、有効な視角となると考えられる。

第二節 「反橋」論—川端康成の戦後—

この節では、川端の敗戦直後のテキストである「反橋」連作の分析を行うとともに、川端における〈戦後〉という問題全体を問い直すための視座を開こうと試みたものである。「反橋」連作は、従来川端康成の戦後における「転換」——「日本回帰」や「魔界」志向など——を象徴するテキストとして位置付けられてきた。本論ではこの連作について、三篇に共通する「デッドレター」という様式の性格について再定位するとともに、特に「反橋」・「住吉」を中心に検討を試みた。この連作に認められるのは、〈起源〉への志向を担いつつも、諸レベルに亘ってそこから逸脱し、一義的な意味や起源に収斂することのない流動的な言葉の連鎖性を示すテキストの様態であると言える。そしてこうしたテキストの性格は、川端の「日本」をめぐる語りと重なり合うだけではなく、川端の初発期以降の理念的・方法的立場とも対応していると見られる。その意味で、川端における「日本」への志向とは、従来の「転換」という理解に反し、モダニスト的な立場に沿った表現上の方法という次元において成立していると考えられるのである。

第三節 『山の音』論—方法をめぐる序説—

この節では、同時代から川端の〈代表作〉として高く評価され、戦後における川端評価の起点となったテキストである『山の音』について、川端の所謂「日本回帰」的な言説との関わりと、初期以降の方法的な脈絡との関わりを視野に入れつつ、様式的な水準に重点を置いて分析を試みることを課題とした。『山の音』は、老境にさしかかった主人公・尾形信吾にほぼ一貫して内的焦点化しつつ、家族をめぐる諸問題をはじめとした多様な話題・挿話によって織りなされていくテキストである。作中に示される信吾の形象や、直線的な物語ではなく信吾の「心境」を前景化する性格は、一面で、川端の「日本回帰」的な言説と対応する性格を持っていると見られる。しかし、このテキストの性格は、決して「心境」の表象といった次元に回収されるものではない。本節では、信吾の思考や判断が形づくられ、変化にさらされる過程そのものに重点を置くこのテキストの様式的な特質を指摘するとともに、こうした性格のもとで、テキストが日常的な脈絡からの離脱をしばしば示す意識・思考の推移を形づくっていることを、「古い」や「音」・「夢」といった諸要素の意義とあわせて分析した。このようなテキストの性格は、「日本」をめぐる文化論的な語りと、一義的な表象性を否定するような方法的なベクトルとが交差する川端の戦後における営為の性格と、明瞭に対応していると考えられる。

第五節 戦後における〈記憶 - 忘却〉の方法—他者としての「過去」—

戦後における川端の諸テキストにおいては、記憶の不確実性や失調、忘却や無意志的な想起が、実に広範にモチーフとされている。本節では、このような〈記憶 - 忘却〉をめぐるモチーフが持つ性格について、戦後の代表的な短編である「弓浦市」の分析を手がかりとして、検討を試みた。「弓浦市」は、記憶の衰えに悩まされる小説家・香住が、他者（婦人客）の語る自らの過去に強く動揺させられていく物語であるが、そこで提示されているのは、〈過去〉という領域を、無数の〈他者の過去〉が到来する未完結なものとして開く性格であると考えられる。そしてこのような〈記憶 - 忘却〉のモチーフは、人間の〈生〉を規定する「言葉」の次元を問題化するとともに、〈生〉の安定的な秩序が流動化・解体

するような契機を問題化してきた川端文芸の方向性の、確かな延長上に位置付けられるのである。

以上の検討を通じて、本研究では、川端康成の文学活動を導いたモダニスト的な立場の内実を明らかにするとともに、その小説テキストの特質を説明すべく具体的な分析を行った。また、「日本」や「伝統」といった概念を実体化・自明化してきた研究史に対する批判を行うとともに、川端における「日本」・「伝統」言説が、モダニズム的な論理との関わりにおいて構築されていることを解明した。以上の二点において、川端康成をめぐる既存の文学史的な把握の問い直しを行うとともに、一九二〇～三〇年代のモダニズムの論理が戦後以降の文学的な展開に接続していく一つのありようを示し得たことが、本研究の成果である。

残された今後の課題は多いが、特に次の三点が挙げられる。第一に、本研究は川端文学の実験的な側面の検討を中心とすることで、結果的に「少女小説」なども含めたその多面性の問題は検討の射程から外れることとなった。ゆえに、川端の文学活動が持つ多面的なあり方について考察することを通じ、本研究で解明してきた方法的立場の意義を再検討していくことが、今後必要である。二点目として挙げられるのは、川端の小説テキストの同時代的な位置を、より広範な社会的・文化的なコンテクストとの関連において問い直していくことである。本研究では、川端のテキストや批評言説の内在的な分析を中心とすることで、その同時代の言説空間における意義や問題性については、十分な検討を行うことが出来なかった。特に、映画やラジオといった諸メディアが発達していく同時代の状況との交通という問題は、川端のモダニスト的な実践の性格を（正しく「言葉」というメディアをめぐる問いとして）再検討する上でも重要であるだろう。そして三点目は、同時代の他のモダニスト的な作家達の活動について検討することである。本研究が検討してきた川端の試みが持つ射程や限界は、今日なお十分に解明が進められていない同時代のモダニズム文学の性格を検討することを通じて、より微細に測定される必要があると考えられる。以上を今後の課題としたい。

論文審査結果の要旨

本論文は、大正末期から昭和20年代に至る川端康成の小説および評論を対象とし、とくに西欧モダニズムとの交渉を基軸として考察を加えることによって、川端文芸を貫く小説の方法を明らかにしたものである。本論の課題は、モダニズムを基盤とした川端の理念的立場とその小説の方法との相関を具体的な表現様式の分析をとおして明らかにすること、そしてモダニズムとの関わりを視野に入れつつ戦前から戦後に至る川端文芸の展開の総体を捉えることによって、旧来の〈日本的・伝統的な作家〉としての評価の枠組みを問い直すことに置かれており、テキスト自体の精緻な分析を通してその課題の解明が試みられている。全体は五章よりなり、本論部分は全三章十一節で構成されている。

第一章「川端文芸の初発期―「新感覚主義」の生成と射程―」では、作家としての始発から雑誌『文藝時代』での活動期までの川端の初発期が分析の対象とされる。「新進作家の新傾向解説」その他の川端の批評言説の検討を通して川端の前衛主義的な文芸理念を明らかにした上で、その理念的立場と同時期の小説テキスト―「招魂祭一景」「青い海黒い海」「春景色」等―の相関について考察を加え、それらのテキストが示す反リアリズムの性格、前言語的な意識や感覚への接近の試み、言葉の水平的な連鎖性を呈示するレトリック等に、モダニズムの理念に支えられた川端固有の小説の方法が認められることを指摘している。第二章「昭和初年代の川端康成一方法の諸展開―」が取り上げるのは、日本の文壇にお

いてモダニズム文芸が多彩に展開した昭和初年代の川端の文芸活動である。この時期の川端の「新心理主義」への傾斜の分析を通して初発期以来の川端の方法的立場を確認した上で、代表作「抒情歌」や異色作「散りぬるを」その他の小説テキストの緻密な表現分析によって、川端の方法によって裏打ちされたそれらのテキストの呈示する流動的で錯綜したエクリチュールの様態を鮮やかに照射している。「川端康成の戦後―「新感覚主義」のゆくえ―」と題された第三章は川端の戦後のテキストを問題とする。「反橋」や『山の音』を中心とした分析を通して、一義的な意味に収斂することのない流動的な意識や思考を前景化するという、戦前から持続するテキストの様式を確認することによって、川端文芸を貫流する方法の所在を指摘し、併せて日本的・伝統的な作家という川端評価が戦後の言説状況の中で構築されたものに他ならないことを明らかにしている。

本論文は、以上の分析を通して、初発期から戦後に至る川端文芸を貫く小説の方法を明らかにしている。川端康成を、日本的・伝統的な作家と見做す旧来の固定的な評価から解き放ち、戦前から戦後に至るそのテキストを貫流する20世紀小説的な性格を鮮明に指摘する本論の見解は極めて説得的である。従来 of 川端研究においては十分に検討されることのなかった前衛的な性格を備えた川端テキストの精細な分析も優れた成果を挙げており、斯学の発展に寄与するところ多大なものがある。

よって本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。